



奇談 冒險

少女

女

島

(五)

永代美知代

命かけて荒海へ

▲深山艦長の手に救はる▼

まゆみの飛行機は、またしく閑に、軍艦の甲板とすれすれの處まで降りて来た。そして軍艦のぐるりをゆるりと周つた。

『や！ あれは秋月博士の令嬢ぢや！』

博士と親しみの深い深山艦長は、驚いて今一度双眼鏡を手にした。さうだ、さうだ、確かにそれは秋月博士の愛嬢まゆみに相違ないのである。

まゆみは、どうかして軍艦の上へ飛行機を止めようと思つた。然し、特別の装置のない艦上へ降り着くことは危険であつた。艦の周囲を廻りながら、大

聲で話しかけてみたが、それも發動機の爆音に妨げられて通じなかつた。

『今からロンドンへ歸れば遅くなる。この軍艦にすぐ来て貰へば、早く皆を救へる。』

さう思ふと、まゆみはもうぐずぐずしてはゐられなかつた。それで、まゆみは命がけの冒險をしようと思つた。

まゆみは、大事の海圖をしかと内懐へ押し込んで、自分の身体を操縦席に結へつけてあつた帯を外した。それから發動機の運轉を止めて、漕とすれすれになり、忽ち機を海面へ浮かせてしまつた。そ

の刹那に、自分から身を躍らして、荒濤わき立つ大海原へ、ざんぶとばかりに飛び込んでしまつた。

巽刻から機上のまゆみの容子を、双眼鏡で詳しく見つめてゐた深山艦長は、すぐ、まゆみの決心を察した。それで逸早く艦の進行を止めさせ、急いでボートをおろさせた。

まゆみが濤の中へ身を跳らせたのは、丁度艦のボートが下されたのと同じ時であつた。ボートは濤を切つて、まゆみの傍へ漕ぎ寄



つた。

危ふく怒濤に溺れようとしたまゆみが、水兵達の手で首尾よくボートへ助け上げられたのは、それから五分ばかり後のことであつた。まゆみは澤山潮を飲んでゐた。當り前ならばもう夙くに溺れてしまつたが、よし助けられても正氣はなかつたであらう。

然し、まゆみの氣は張りつめてゐた。軍艦の中へ運び上げられて、將校の顔を

見ると、まゆみはすぐに、

少女の中の少女

▲秋月まゆみの名は驚る▼

「大變です。六十人の少女がこの島へ擡はれてゐますから、早く助けて下さい。敵はゐませんけれど、食料がないのです。早く艦をやつて下さい。」と叫びながら、懷中から少女島への海圖を取り出した、その時、静かにまゆみの肩を叩いた人がある。まゆみは振り願つて、その人の顔を一目見ると、「あッ、遠山の叔父様！」と、艦長の手によろ／＼と取り縋り、「早く艦を！ 早く救つて！」さう云ふと一緒に、ばつたり倒れて氣を喪なつてしまつた。あゝさすがの少女丈夫も、これでもう安心したのである。まつたく、いくら勝氣だと云つても、まゆみはたつた十二歳の少女である。驚愕も、責任も、仕事も、歳に比べてあまりに大きく、あまりに重すぎた。

軍艦が少女島へ着いたのは、それから七八時間後の丁度午後の二時過ぎであつた。その些し前に疲勞から恢復したまゆみは、艦長室で遠山艦長に今度の怖ろしかつた出來事を物語つてゐた。聞くにつれて艦長は、幾度となく感歎の聲をもらした。「うむ、よく爲た！ うむ、よくやつてくれた。」そして遠山の叔父様、私が助けて頂いたところから、ロンドンへはまだ餘程あつたのでせうかしら？」「うん、丁度この島からロンドンへの半分道くらゐの處ちやつた。」「まア、ぢや本當によござんしたわねえ。」「うん、よかつた。大に好都合ぢやつた。」「お父様はさぞ心配なすつて被在るでせうねえ。」「安心せい、あなたが艦へ來ると、すぐ無線電信を打つといた。今頃は方々の家で大喜びぢやらう。」

話してゐる間に、艦は少女島へ着いたのである。すぐ陸戦隊が上陸した。案内はまゆみの役であつた。

の老婆であつた。それにしても、ラツキー大探偵を初め六十人の少女達は、どうしたのであらう？

を、どんなにか一同が喜ぶであらうと思ひながら、やがて建物間近く進んで行つたまゆみを覗つて、何者かが拳銃を放つた。續いて三發、六發――。

もしやと思つたまゆみが、獄舎の方へ駆けつけてみると、果せるかな、大きな扉の外から堅固な錠がかけられてゐた。錠は打ち破られた。眞先にまゆみが見合はせて、その無事を喜び合つた。六十人の美しい少女達は、一時に花の開いたごとく、喜び勇ん



それはロツゲの艦と共に沈没した筈のジョンといふ運轉士で、あとの二人は正しく縛られてゐた二人

「大探偵！」二人は第一に顔を上げてゐた。お、まゆみさん！

でまゆみの周囲に縛せ寄つた。まゆみは口早に日本の軍艦が援けに來たこと報告した。

『まゆみさん、あなたは吾々の生命を二重に助けて下すつたのだ。吾々は餘り油断をしてゐたのだ。晝過ぎに、今朝新しく來た少女達に獄の中を見せようとする、みんな一緒に入つてしまつた。さて出ようとすると、扉に錠が下りてゐる。大方あの老婆が繩を抜けてやつたこと、思つてゐたが——』

『いえ、あのジョンの仕業です。』

『ジョン？ はゝア、なるほどね。』

と、さすがの大探偵も面目なげに黙つてしまつた。

——萬死に一生を得たジョンは、丁度一同が獄へ

入つた後へ迎りついて、二老婆の繩を解いてやり、獄の錠を下して、にやりと薄氣味悪く笑つたのであつた——。

日本の軍艦は海の花、その軍艦に花ともまがふ少女の六十人が便乗して、その日の夕方、怖しい思ひ出の少女島を後にロンドンへ向つた。その少女の中の少女、花の中の王たる秋月まゆみの名は、ながく異國の端々にまでも讃へられるであらう。(をばり) ヲツキー大探偵も、ジョンと二老婆とを縛めてこの艦に便乗し、ロンドンへ着くと、かれて調べてあつた彼等獨探の大陰謀を發いて、殊功を立てた。